日台韓シンポジウム参加報告書

名称：JKT tripartite Symposium (Special Session)
日程：2026 年 4 月 26 日 9:00-11:30
（3rd International Congress on Primary Care 2026 in conjunction with Annual Conference of Family Doctors 2026 の内部企画として、会期 2026 年 4 月 24 日金曜～4 月 26 日曜）
開催場所：韓国　水原コンベンションセンター　Suwon Convention Center Room 4
主催：The Korean Academy of Family Medicine（KAFM）
テーマ：Home Based Medical Care Across East Asia: Practical Models & Real-World Experience.
座長：
Serng Pak (National Health Insurance Ilsan Hospital, Korea)
JungHwan Kim (Eulji Univeristy, Korea)
日本からの発表者：
山梨 啓友 （長崎大学病院総合診療科 准教授）
井口 真紀子 （祐ホームクリニック大崎 院長）

＜概要＞

シンポジストとしては、台湾から Dr. Wen-Jung Sun, Dr. Chia-Ming Li、日本から山梨啓友、井口真紀子、韓国から Dr. Chongho-An, Dr. Choong hyung Lee の計 6 名が登壇し、座長は Dr. Serng Pak、Dr Jung Hwan Kim が担当した。各 20 分ずつの発表の後、30 分程度の質疑応答が行われた。参加者は 30 人程度、質疑応答も活発に行われた。

台湾は 1990 年代から在宅医療に取り組み始めている。Dr.Sun からは高齢に伴う通院困難などがベースで始まったこと、実際に行っていることなどの事例が示された。患者を重症度で層化し、重症度に応じて関わる職種を分けたり 24 時間対応の適応を行うなど、限られたリソースを効率的に使うための医療システムのデザインなども紹介された。Dr.Lin はさまざまなモニタリングシステムなどを駆使した Hospital at home について先駆的な取り組みを行っており、その紹介と、2026 年 6 月に台湾で行われる国際学会の紹介を行った。

日本からは、山梨医師が日本のデータを提示しながら日本における在宅医療の現状や将来予測について説明し、実際に非常に複雑性の高かった事例に対する介入により良い結果につながったこと、在宅医療は大きな意味を持つことを提示した。井口医師は、在宅医療を始めたばかりの医師がどのような困難を感じるかと、それに対する教育についての話題提供を行った。

韓国では在宅医療はまだ制度的に整っておらず、ほとんどの人は病院か施設で最期を迎えている。在宅医療は試験的な取り組みに留まり、ボランティア的になっているということであった。韓国の An 医師は、緩和ケア医としての home care の実践、Lee 医師は実際に在

宅医療に取り組んでいる経験や慢性疾患ケアとの連続性がないことなどの限界も示された。

＜井口真紀子医師コメント＞

この度は、JPCA からの多大なご支援のもと、貴重な機会をいただき深く感謝しております。私は医師の内面に焦点をあてて行ってきた自分の研究を踏まえ、Training of Home Based Care Physicians in Japan という題で、在宅医療というのはただ医師が患者の家に行くだけではなく、医師自身も役割のゆらぎを経験すること、在宅医療は根本的には他者の多様な生を受け入れることが求められる医療である以上、その教育自体も研修者を受け入れ、ケアするものである必要があることを発表しました。

現在では思想色はかなり薄れていますが、日本の在宅医療は 1970 年代くらいから病院医療という権力に対するアンチテーゼとして立ち上がってきた歴史があります。今回 3 カ国を比較して話をしたことで、台湾のように病院を生活に持ってゆく形での展開、韓国のように緩和ケアとしての広がり、など多様な形があることが可視化されたように思います。在宅医療は生活文化と深く結びついており、各国それぞれの展開を通して自分たちを振り返って考える機会になったと思います。とはいえ、たとえば患者さんが飲みきれずに溜めてしまった大量の残薬の写真などは各国みな苦笑い、など、共通しているところも多くありました。共通しているところ、違うところ、など整理しながらディスカッションすることの重要性、そしてこうした国際的な場所への発信や交流の重要性を強く感じる機会となりました。

＜山梨啓友医師コメント＞

本シンポジウムを通じて、日本で発展してきた皆保険制度や介護保険制度、地域包括ケアシステムといった枠組みが、韓国や台湾においても今後の制度設計の中で参照され、整備されていく流れにあることを改めて確認することができました。特に、高齢化の進展に伴い、病院中心の急性期医療から在宅を含めた地域での急性期対応へと移行していく必要性については、三国共通の課題として認識されており、それぞれの国で模索が進められている点が印象的でした。

また、在宅ホスピスを含む終末期ケアに対する需要の高まりと、それに対応するための診療体制整備について、大学や基幹医療機関が中心となって取り組みが進められている状況についても知見を得ることができました。特に台湾における Hospital at Home の取り組みやモニタリング技術の活用は、今後の在宅医療の質向上に向けた重要な示唆を含んでいると考えられました。

さらに、2026 年 6 月 27 日～28 日に台湾で開催予定の Asia Pacific Hospital at Home Congress（アジアパシフィック在宅医療学会）など、関連する国際学術活動の紹介があり、日本からの積極的な参加が期待されていることが National Taiwan university Li Chia-Ming 先生から（台湾在宅医療学会副理事）共有されました。こうした国際的な議論の場に継続的に関与していくことの重要性を強く認識しました。

本日韓台トライパータイトシンポジウムは、過去 3 年間継続して韓国家庭医療学会が主催してきた International Congress on Primary Care（ICPC）の中で実施されました。今回の運営や参加状況を踏まえ、日本プライマリ・ケア連合学会（JPCA）学術大会において同様に日韓台トライパータイトシンポジウムを行っていくのであれば、外国人参加者を意識したセッション構成や国際交流企画の充実を図る必要があり、運営上で多くの示唆を得ることができました。（初日のレセプションや KAFM ICPC Presidential dinner での集会の場の設定や K(Korea)、E（English）と表記を示したプログラム構成など）

なお、本 ICPC では基調講演として、イタリア家庭医療学会より Luigi Bracchitta（University of Milano）が招聘され、イタリアにおける地域包括ケアの構築について紹介がありました。欧州における実践との比較を通じて、地域包括ケアの普遍性と各国の制度的・文化的背景に応じた多様性の双方を理解する貴重な機会となりました。また、ソウル大学 Seoul National University の BeLong Cho 教授をはじめとした韓国全土からの参加者が出席しており、韓国大学 Korea University の Gyu Bae Lee 助教（WONCA-APR 釜山の総合司会）など若手の活躍も目立ちました。

国内からは大西弘高先生、石丸直人先生も参加されており、日本としてのプレゼンスを示すとともに、今後の国際的な連携強化に向けた基盤が着実に形成されつつあると感じました。今回の経験を踏まえ、引き続きアジアを中心とした国際的なネットワーク構築と学術交流に積極的に関与していきたいと考えています。

＜日韓台トライパータイトシンポジウム　プログラム概要＞

09:00-11:30	Global Session 11 Ⓔ	**Special Session: JKT tripartite Symposium - Home-Based Medical Care Across East Asia: Practical Models & Real-World Experience**
		1. Home-Based Medical Care in Taiwan: From Live to Die Wen-Jung Sun (Tainan Municipal Hospital, Taiwan)
		2. Hospital at Home Program in Taiwan: Integrating Aging in Place with Emergency Medical Support Chia-Ming Li (National Taiwan University Hospital, Taiwan)
		3. Home-Based Medical Care in Japan: System Design and Real-World Practice Hirotomo Yamanashi (Nagasaki University Hospital, Japan)
		4. Training of Home Based Care Physicians in Japan Makiko Iguchi (Yu Home Clinic Osaki, Japan)
		5. Home Care Hospice: Clinical Experience in South Korea Changho An (Palliative Medicine, The Catholic University of Korea, Korea)
		6. Home-Based Medical Care in Korea: Real-World Clinical Experience and Lessons Learned Choong hyung Lee (Seoul Bom United Clinic, Korea)
		7. Group Discussion
		Chairs. Serng Pak (National Health Insurance Ilsan Hospital, Korea), JungHwan Kim (Eulji University, Korea)

＜写真＞

（文責 山梨、井口　2026/04/30）